

# ウルトラNプロジェクト ウルトラマンニウガ

サウザントピース

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある夢から青年、夢野光一の日常は崩れだす。

# 目次

設定集1	1
episode 1 start / 始まり	12
episode 2 決断 / decide	20
episode 3 約束 / ジンガノグ レ	29
episode 4 真木舜一 / ザ・ ファースト	39
episode 5 残虐 / スペースビ スト	52
episode 6 愛 / ヴイオレ	
episode 7 守るもの / セイバ ー	60
episode 8 魔獣 / violen ce	69
episode 9 臨界点 / over	78
episode 10 災厄 / G	95



# 設定集1

・登場人物

ゆめのこういち  
夢野光一

年齢19歳

この物語りの主人公にしてデユナミスト。

ウルトラマンネクサスとしてスペースビーストと

戦うことになる。

スペースビーストを倒すことは仕方ないと割り切っては

いるが実は心の中で泣いている。

子供の頃から父親の道場で格闘の術を学んでいる。

その為父親を師匠と呼ぶ。

ガルベロス

原作とは違い、仲間思いな性格。

強くなる為には怪獣たちを喰らうが極力しないようにしている。

金縛りと幻覚が得意。

柳瀬薫  
やなせかおる

年齢13歳

光一の父親の道場に通う中学生の少女。

父親が失踪した為母子家庭である。

中学生なのに身長が低いことを気にしてる。

(一樣ヒロインだけど今後によってはその地位取られるかも)

子供の頃から不思議な力をもっているがいつもは隠している。

勉強は補習が必要なレベル。

佐々木みこと

年齢75歳

国直轄の病院に勤務する医師。

別世界のことが書かれている本、別の世の記録を持っている。

どこからともなく現れたり、

別の世の記録を指を鳴らして手に出現させたり、

マジックの域を超えたマジックを披露できる。

光一や凌牙にウルトラマンがいるのを知っている。

山村凌牙  
やまむらりょうが

年齢17歳

光一の親友。

妹である美樹を守る為に力を使う。

もしくは妹が悲しくなるような出来事が起こりそうなとき。

ノスフェルの一件で死にかけてたがゼロのおかげで死なずに済んだ。

興味のないことを知ってしまったときは棒読みになる。

山村美樹<sup>みき</sup>

年齢14歳

薫の友達でクラスメイト。

ノスフェルの一件で両親を失う。

性格は少々子供っぽい。

勉強はそこそこ。

魔姫リコ

年齢20歳

光一の幼馴染み。

いつからか失踪していた。

闇の力を使ってスペースビーストたちを光一の町に送り込んでいたが、

カオスファウストとして光一と戦ったとき、

薫の呼びかけ（？）で何の為に闇になったのか分からなくなったのと、  
ネクサスとなった光一の力で闇から解放された。

光一の父親の道場ではかなりの実力者だった。

夢野石神<sup>いしがみ</sup>

年齢48歳

光一の父親。

道場を営みそこで格闘の術を教えている。

たまに心について色々なことを哲学的に言う。

一瞬で嘘を見抜いたり、何かに悩んでいるのを見抜いたり、  
結構すごい人。

ウルトラマンネクサス

年齢35万歳以上

光一に取り憑いたウルトラマン。

原作とは違い精神世界を作ることができる。

そこで光一とかつてのデユナミストを会わせている。

ウルトラマンゼロ

凌牙に取り憑いたウルトラマン。

原作と違うところはまだはつきりしていない。

・アイテム

エボルトラスタ―

ネクサスに変身する為の神具。

原作と違いは今はない。

ブラストクラツシャー

ネクサスが与えた神具。

剣モードで色々な物をきれる。

銃モードは真空弾でスペースビーストを倒せる。

召喚モードでストーンフリーユージェルを呼び出せる。(使わない)

・ウルトラマンネクサス

形態(スタイル)

アンフアンス

ネクサスの基本形態。

ネクサスが元来もつ姿の一つ。

光線技、特殊な技、格闘技などが使える万能な姿。

姿は銀色の体に黒いラインが入った姿。

必殺技はクロス・レイ・シュトローム。

ジュネツス

ネクサスの戦闘形態。

ネクサスが元来もつ姿の一つ。

アンファンスの数倍の戦闘能力をもつ。

姿は赤と銀色の体に黒いラインが入って、

胸のエナジーコアの上にコアゲージが追加された姿。

原作と違いメタフィールドは使えない。

必殺技はオーバー・レイ・シュトローム、スピル・レイ・ジエネレート、

クロスオーバー・レイ・シュトローム。

ジュネツスジンガノグレイ

ネクサスの派生戦闘形態。

真木舜一と同じように約束を果たそうとした光一に反応し、誕生した姿。

ジュネツスより素早さと飛行速度が上昇している。

更にウルトラマンザ・ネクスト（原作の方での最初のネクサスの姿）の技も使える。

姿はジュネツスを銀とオレンジの体にし、赤いラインが入った姿。

最高速度時の空を飛ぶ姿はまさに“流星”。

必殺技はエボル・レイ・シュトローム、ラムダ・レイ・スラッシュャー、  
シューティングスター・レイ・ジエネレート、ハイパーエボル・レイ・シュトローム。  
スベック

身長49 m

体重4万4千トン

飛行速度マツハ7

ジュネツスヴィオレ

ネクサスの派生戦闘形態。

光一の守りたいという一種の愛が橘さゆりの家族への愛に同調し、誕生した姿。  
癒しの技を得意とし、超能力を使うことができる。

姿はジュネツスを紫の体にし、青いラインが入った姿。

必殺技はコズミック・レイ・シュトローム、ストライク・レイ・ジエネレート、  
ミラクルコズミック・レイ・シュトローム。

スベック

身長49 m

体重4万4千トン

飛行速度マツハ4・5

・特徴

エナジーコア

ネクサスがもつ危機を知らせる器官。

体力を消耗すると光が点滅する。

コアゲージ

本来はメタフィールドが張れる限界時間を知らせるもの。

アームドネクサス

ネクサスの腕に存在するエネルギーをもつ部分。

アンフアンス、ジュネツスの時は赤く、

ジンガノグレーの時はオレンジ、

ヴィオレの時は紫に色が変わる。(赤は本来の色。)

カッターのようなものとクリスタルが付いている。

必殺技(オリジナルのものを紹介)

クロスオーバー・レイ・シュトローム

ジュネツス状態で放てる最強の超超必殺光線。

オーバー・レイ・シュトロームよりはるかにエネルギーを使うため、

一回の変身で一度しか使えず、一秒足らずしか放てない。

その代わり、威力はオーバー・レイ・シュトロームの数倍で、相手を素粒子レベルで分解することができる。

シューティングスター・レイ・ジエネレート

ジンガノグレーで使える高速で相手を攻撃する技。

一撃でスペースビーストを倒せる威力をもつ。

エボル・レイ・シュトローム

ジンガノグレーで使える光線技。

クロス・レイシュトロームの1.5倍の威力をもつ。

ハイパーエボル・レイ・シュトローム

エボル・レイシュトロームの強化版にしてジンガノグレーの最強技。

エボル・レイ・シュトロームと同じくジンガノグレーしか使えない。

コスミック・レイ・シュトローム

ヴィオレで使える万能光線。

動きを止める、バリアになる、浄化するなどその効果は様々。

もちろん破壊光線にもなる。

ストライク・レイ・ジエネレート

ヴァイオレで使える破壊光球。

相手の技を利用して放つリバーブス ver も存在する。

威力はクロス・レイ・シュトロームと同等。

ミラクルコズミック・レイ・シュトローム

ヴァイオレで使える最強技。

破壊と浄化と治癒を同時に行える。

・カオスファウスト

魔姫リコがダークファウストから変身した姿。

姿はベースが暗い銀、ダークファウストで赤だった部分を紫に、

黒だった部分を白に、金色だった部分を黒にした姿。(目は黒)

スパック

身長 48 m

体重 3万2千トン

飛行速度 マツハ 8

必殺技

カオス・レイ・ジャビローム

カオスファウストの必殺技。

威力はダーク・レイ・ジャビロームの数倍。

・ウルトラマンゼロ

不明

・スペースビースト、宇宙人

ネオサーベル星人

闇の力で怪獣を操れる。

外見がサーベル星人より尖った姿。

クトウルフェル

何者かによってノスフェルとクトウーラが

強制超合体させられて誕生したスペースビースト。

地面から触手を出して相手を拘束して捕食する。

こいつのセリフは最後のもの以外は意味があるが理解しない方がいい。

????

ノスフェルとクトウーラを強制超合体させた張本人。

何者かは不明。

e p i s o d e l s t a r t / 始まり

青年が街中を走っている。楽しそうに。

この青年、夢野光一は何時もの日常を過ごしていた。  
しかしある事からその日常は崩れ始めた。

「ここはどこだ」

彼が困惑していると光とともに巨大な巨人が現れる。

「おまえはだれだ？」

光一は目の前の巨人に質問した。

「私はノア・・・ウルトラマンだ。」

「・・・夢か。最近似たような夢ばかり見るな。」

夢から覚めた光一は布団から這い出て着替えて部屋を出た。

「おお、起きたか。」

「おはようございませす。師匠。」

光一は眠そうに目の前の人物に朝の挨拶をした。

因みに今光一がいる所は彼の師匠（父親）の道場であり、今の彼の家である。

「おはよう。で、どこへ行く。」

「散歩しに外へ。」

「ああ、行つてらつしやい。」

「行つてきませす。」

ぐくぐく普通の会話をして彼は外出した。

「あく、あの夢本当になんなんだ？ 妙に現実味があるし。」

光一が夢の事を考えながら散歩していると・・・

「グアアア・・・」

「え？」

何かの声でした。その直後に・・・

「グウアアアああ!!？」

怪物、スペースビーストがビルを壊しながら現れた。

「何じやありや!?」

スペースビーストのいきなりの登場に驚く光一。

「あれをほつといたら・・・」

スペースビーストを見た光一は何かを思い出す。ある悲劇を、

自分でも何かは分らない悲劇を・・・

「そんな事・・・させるか!」

無謀と分かっているながらビーストに突っ込む光一・・・そこに・・・

キラン

「え?」

一筋の光が差し、その中から“エボルトラスター”が現れた。

「これは・・・」

光一はゆつくりとエボルトラスターに触れた。

「これを使え」

突如聞こえた声に従い光一はエボルトラスターを引き抜いた。

そして・・・

キラン・・・ズドオオオン!

光一は光と共に“ウルトラマンネクサス”に変身した。  
「す・すげえ・・・。」

ウルトラマンネクサスになった事に驚く光一。

更に目の前の怪物の名が頭に浮かぶ。

「グウアアア・・・（オメエなんなんだ。）」

「ウルトラマン・・・らしいぞ。ザ・ワン」

「グウアアア！（何故俺の名を!??!）」

「なんでだろうな！」

ネクサス（光一）は戦いの場を替える為に空を飛んだ。

「グウアアア!!?!?!?!（待てえええ!!?!?!?!）」

ザ・ワンも空を飛んでネクサスを追いかける。

「よし、  
ここなら戦える。」

ネクサスは戦いの場を選んだ場所は海、そこにゆっくりと降りた。

「グウアアア・・・（追いついたぞ!）」

ザ・ワンも降り立つ。

ネクサスとザ・ワンは互いに距離を取り、しばらく経った後、ぶつかりあった。

「ジュア!」

「グアアアア!!」

ネクサスとザ・ワンは互いに殴り合うとまた距離を取る。

「シエア!」

ネクサスは“パーティクルフェザー”を数発放つ。

ザ・ワンはそれらをはたき落とすと尻尾をネクサスに巻きつけた。

「ジュア!!?」

「グウアアア!（ハハハハ!）」

ザ・ワンは巻きつけた尻尾でネクサスを締め上げ、更に電撃を浴びせる。

「ジュアアアア!!?・・・ジュア!」

ネクサスは苦しみ、片膝をつきながらも“クロス・レイ・シウトローム”を放つ。

尻尾は焼き切れてしまった。

「グウアアア!!?（なにいいい!!?）」

「シユアー！」

ネクススは尻尾を投げ捨てると姿を銀色の姿、

“アンフアンス” から赤い姿の“ジュネツシユ”へ変えた。

「グウアアア!!?!!? (死ねえええええ!!?!!?)」

尻尾を焼き切れ激昂したザ・ワンは光球を発射した。

が、それはネクススの左腕に吸収された。

「グウアアア!!? (な．．．!!?)」

「シユアアア!!? (くらえ!!?)」

吸収したエネルギーを光に変えてネクススは“スピル・レイ・ジェネレート”を放つた。

「グウアアア!!?!!?」

ザ・ワンはスピル・レイ・ジェネレートを喰らい吹き飛んだ。

「ハア．．．．．」

ネクススは腕を大きく回し、光をエナジーコアに集めて、“コアインパルス”を放つ。

「ウオオオオアアアアア!!?」

ドオオオオオオオオオ!!?」

ザ・ワンは勢いよく吹き飛んで倒れ伏し、爆散した。

「シユア！」

ネクサスは家の前に向かいながら光一に戻った。

「今日は一体なんだ!?」

突然の非日常に驚きを隠せない光一。だが、この非日常はまだ続く。

l l l t o b e c o n t i n u e d l l l

episode 2 決断／decido

「はあ、昨日はとんでもない日だった。」

ベンチに座り込んでいた光一は昨日のことを思い出していた。

「これからあれ倒すのが日常になっちゃうのか？」

光一はあれで終わりなわけがない、これから似たようなのが現れる、そう思っているようだ。

「さて、変身できるように使い方を調べるか」

光一はエボルトラスターを取り出して静かに悲しく呟いた。

所変わって何処かのトンネルでは、

「ウイルウイイイ！」

謎の生物が食事をしていた。

「いやー！」

生物から女性が逃げようとするが、

「ウイルウイイイ！」

生物は女性に液体をかける。

その液体は糸状になって女性に巻きつき、固まって女性を動けなくした。

更に女性と一緒に来ていた人達を生物、"ペドレオン"は触手で捕らえゆつくりと一人づつ食べていき、

最後に女性を食べた。ゆつくりと。足から。

その数分後、

「グルウウウウ・・・。（おい、ペドレオン。）」

「ウイルウイイイイ？（どうした？ガルベロス。）」

「ガルベロス」が現れた。どうやら二体共スペースビーストのようだ。

「グルウオオオオ！（ウルトラマンを倒せ、だそうだ）」

「ウイルウイイイイ！（よおしい！早速行くぞ！）」

「ならば送ってあげましょう。」

二体は転送された。謎の存在によって。

「ウイルウイイイイ！（奴と戦う前にコイツら食っちゃおうぜ！）」

「グルウ……。(そいつらは奴をおびき出す為の存在。今は食うな。)」

二体の言うコイツラとはペドレオンが捕らえて来た光一のいる道場に通う子供達だ。

「グルウ……。(つうかコイツラ恐怖しすぎて気絶してるぞ。)」

「グルウオオオオ？(そーいやあの液体なんだ？)」

「ウイルウイイイ！(アレは最上級の恐怖を味わらせる為に造ったのよ！空気に触れたら糸のようになって絡みつき固まって動けなくするのさ！)」

5分後……………

「グルウ……。(こねえ……。)」

「ウイイイ！(何をやっているんだ！)」

1分前

「やつと変身できるようになった。」

光一はどうやら今までどうやったら変身できるのか究していたようだ。

ドクン

エポルトラスターが心臓の鼓動のようなりズムで光る。

「！……………さあ、行くか！」

光一は居合の要領でエポルトラスターを引き抜き、上へ掲げた。

光一は光に包まれ、ウルトラマンネクサスに変身した。

「シユアー！」

ドオンッ！

「グルウ……。 (やっときたか。)

「セア！（行くぞ！）」

「ネクサスは姿をジュネッスに変えようとするが、

「ウイルウイイイ！ (させねえよお！)」

ペドレオンは液体を出した。

その液体はネクサスにかかり、糸状になってネクサスの腕や足に絡み付き動けなくした。が、

「ジユアー！」

ブチッ！

あつさり糸を引きちぎった。

「ウイルウイイイ！ (何いいいい！)」

ネクサスはジュネッスに姿を変え胸のエネルギーコアからコアインパルスを打ち出した。

「セア！」

「グウルアアアア!？」

ガルベロスは吹っ飛び悟った。絶対勝てないと。ガルベロスは逃げ出した。  
「ウイイイイ！」

ペドレオンは液体をネクサスに再びかけ糸を絡ませ、更に触手を巻きつけた。が、  
「ゼア！（無駄だ！）」

ブチッ！

ネクサスには無意味だった。

ネクサスは体の前で両腕をクロスし青いプラズマを発生しながら両腕を立てた。

「ハアアア……」

両腕を一度伸ばし、L字形にしてエネルギーをスパークさせ、

必殺の光線“オーバールレイシユトROOM”を放った。

「ウイルウイイイイ！?（そんな~~~~!?）」

バアアアアンン!!……………

ペドレオンは光の粒子となつて消えた。

それと同時に子供達に絡みついていたペドレオンの糸が消えた。

ネクサスは光一に戻った。

「おいみんな、大丈夫か？」

「……あれ、光一さんどうして……」

子供達はどややら無事だったようだ。  
光一は子供達をそれぞれ家に帰した。

「おい、お前！」

光一は誰かに話しかけた。

「何だ？光一。」

光一が話しかけていたのはウルトラマンネクサスだった。

「あいつらはどういう存在なんだ？」

光一はネクサスにヤツら、スペースビーストについて聞いた。

「ヤツらはスペースビースト、恐怖の感情に引き寄せられ知的生命体を食らう存在だ。」

「なるほど・・・だったら！」

ネクサスの話を聞いて光一は決意した。

「ヤツらのせいで誰かが悲しむなら、俺がヤツらを倒す！どんなことがあっても・・・」

光一はスペースビーストと戦うことを決めた。

それがどんなに苦しい道でも。人を守るために戦うと決めた。

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## episode 3 約束／ジンガノグレー

・・・前回の戦いから三日たった。ビーストは現れていない。

光一の日常は元に戻ろうとしている。が、現実はそこまで甘くは無い。

「グルウウウウ・・・(くそ！どうすればいい！どうすればやつに勝てる!?)」

ガルベロスは悩んでいた。そこに、

「ギイギイイン。(悩んでいるようだねえ。)」

「キュキュウウウウウウンン！(私達がてを貸しましょうか?)」

「グルウオオオオ！(おお、バクバズン、ラフレイア！引きこもりのお前らがよくできてきたなあ。)」

現れたのはガルベロスに引きこもりと言われたバクバズンとラフレイアだ。

「ギイギイイ！(今回は宇宙人を連れてきたぞ!)」

「グルウウウウ。(宇宙人?)」

「ギイギイイ！(そう、その名も、ガッツ星人だ!)」

「はははは！私がガッツ星人だ。ウルトラマンはこの手で倒おおおおす!」

「グウオオ！(よし、行くぞ！姉さんお願いします!)」

「さあ、行きなさい。」

姉さんと言われた女はガルベロス達を転送した。

「今日も何もねえなあ。まあ、それが良いんだけど。」

光一は何もない毎日を楽しんでいた。が、

ピーポーピーポー

「!?!」

壊れるのは早かった。

「薫ー！」

「！こ、光一さああん！」

薫と呼ばれた小学生くらいの少女は泣きながら光一に抱きついた。

「一体何があつたんだ！」

「実は・・・」

薫は事情を説明した。

「みんな練習中に突然倒れて、び、病院に連れてつたら原因が、わ、分からないで、僕どうしたらいいかわからなくて。」

「・・・すいません。」

「え？」

「あなたが光一さん、ですか？」

「はい。」

「このようなものが届きました。」

光一は白衣を着た男性に手紙を渡された。

「!?これは？」

「ついさつき送りつけられましたね。最初の3行以外全く読めません。最初の3行にはあなたなら読めると書かれていました。」

光一はその手紙に書かれている文字を知らない。だが、何故か読めた。

「・・・手紙の内容を言います。」

光一は手紙の内容を話した。

「・・・なるほど、そのラフレイアの持つ体組織がないと、倒れた子供達は助けられないと。分かりました。今すぐ国にこの生物を探してもらおうよう頼みます。」

白衣を着た男性は去って行った。

「・・・」

光一もその場から立ち去ろうとしたが、

「!?薫？」

いつの間にか薫はいなくなっていた。

「い、いた!」

薫は前回の場所にいた。そこにはガルベロス、バクバズン、ラフレイアがいた。

薫は母から護身用に渡されたナイフを取り出した。

「多分、あの花ぼいのがラフレイアだ。」

薫はラフレイアから体組織を取ろうとしていた。が、

「お前は誰だ?」

「え!」

ガッツ星人に見つかってしまった。

「ふん!」

ガッツ星人の目から放たれた電磁波は電磁ロープになり薫に巻き付いた。

「何、これ!?!」

「そいつはガッツ星の電磁ロープだ。そう簡単に切れねえぜ。さて、テメエは人質にで

も……」

フオオオ……ドウオオン!

「グアアア!目が!目がああああ!」

ガッツ星人の目に何かが当たった。

「薫！大丈夫か!？」

「光！さん！」

光一は電磁ロープを手を持つてる武器で切った。

「光！さん、それは？」

「これか？プラスチックラッシャーというやつらしぞ？」

プラスチックラッシャーは剣にも銃にもなる武器だ。

「お前、よくも！」

「薫！どっかに隠れている！」

「え!?!は、はい!！」

光一はエボルトラスターを居合の要領で引き抜き、空に掲げた。

「光！、さん？」

光一は薫の目の前でウルトラマンネクサスに変身した。

「グルウオオオオオ！(きたか!ペドレオンの仇いいいい!)」

「ギイギイイン！(出番だ!)」

「キュキュウウウウウン！(終わりの時ですよ!ウルトラマン!)」

「あれは!！」

「あなたは病院の！」

薫の後ろに白衣を着た男性が現れた。男性はある本を取り出した。

「それは別の世の記録！」

「知っているのか!?!」

「はい、確か別世界の事が書かれていると聞きました。」

「そうだ。そしてこれによればあればウルトラマンという存在のようだ。」

「ウルトラマン。・・・あ!?!」

「ゼア!?! (ぐう!?!)」

「グウルオオオオオオオ!!?!?!?! (おい!?! どうしたアアアアア!!?!?!?!)」

ネクサスは押されていた。理由は敵が4体いるからだ。

「シユア!」

ネクサスはジュネスに姿を変えた。が、

「グウルオオオ! (無駄だ!)」

「ジュア!?!」

ガルベロスの力でネクサスは金縛りにあい動けなくなった。

「ギイギイイン! (くらえ!)」

バッチ!

「ジュアアア！」

バクバズンの爪で切り裂かれ、ダメージを受けた。

「光ーさん！」

「ゼア!? (くう !? )」

「はははは! こんなもんか！」

「ジュアアアアア! (まだだアアアアア! )」

「グウルオオオ!? (まだ動けるのか !? )」

「アアアアア!」

ネクサスはガルベロスの金縛りを弾いた。

「グウル!? (何い !? )」

「ギイギイ!? (色が!? )」

「キュキュウ!? (変わった !? )」

ネクサスの色が銀とオレンジに変わった。

「シユア!」

ネクサスは“ラムダレイスラツシャー”を放った。

「「グウルオオオ!? ギイギイ!? キュキュウウウンン!? (ギイヤアアア

!?! )」」

三体のビーストは火花を散らしながら吹っ飛んだ。

「ハアアア・・・ゼア！」

ネクススは「エボルレイシユトローム」をガッツ星人に放った。

「ウアアア！」

バアアアアアア

ガッツ星人は消滅した。

「キュキュウウウウウウウウンン！（ガルベロス！バクバズン！あなた達は逃げなさい！）」

「ギイギイイ！?（ラフレリア!?なんで・・・）」

「グルウ・・・（行くぞ・・・）」

「ギイギイイン！?（ガルベロス!?まだラフレリアが!?ラフレリアアアアアアア！）」

・・・ガルベロスはバクバズンを連れて逃げた。

「シユア！」

ネクススは「シユーテイイングスターレイジエネレート」を発動した。

「キュキュウウウウウウウウンン!?」

ドオオオオオオオオオオ!!?!!?

ラフレリアは自らの体組織を残して爆散した。

そのあとラフレリアの体組織によって子供達は助かった。

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## episode 4 真木舜一／ザ・ファースト

~~~~光一の回想~~~~

「シューア！」

「グアアアアアア!？」

ドオオオオオンンン  
!!!!

「セアアアア!!」

「キュキュキュウウウウウウンン!?」

ドオオオオオンンン!!

「・・・あれは一体」

「……謎の場所……」

「グルウアアアアア！」

「グオオオオオオオ！」

グツシヤバキツバグツシヤ

ガルベロスは怪獣、ゴモラ三体と戦っていた。そのうち一体をバラバラにして食らった。

「グオオオオオオオ！」

二体目のゴモラは超振動波を放つ。

「グルウアアアアア！」

ガルベロスも超振動波を放ち、ゴモラの超振動波を押し返す。

「グオオオオ！」

超振動波を押し返されたゴモラはガルベロスの超振動波が直撃し吹っ飛びながら爆発した。

「グアオオオオオオ！」

ドゴオオオオオンバアアアンン!!?!!?

「グルウオ！（あと一体！．．!?）」

ガルベロスはあたりを見渡すが最後のゴモラの姿がない。

「グルウオ・・・(逃げたか・・・)」

「やっているわね、ガルベロス。」

「グルウオ・・・(姐さん・・・)」

ガルベロスに声をかけたのは姐さんと呼ばれる存在だった。

「グルウオ・・・(そういえば姐さん。)」

「なに？」

「グルウオ！（姐さんの名前てなんですか？）」

ガルベロスは姐さんに名前を聞いた。

「魔姫リコよ。」

彼女は静かに自らの名を呟いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

~~~~~空き地~~~~~

「あの姿は一体なんなんだ？」

光一の家の近くの空き地、そこで光一は前回なったあの姿について考えていた。

「あんな姿、ネクサスの記憶にはなかったぞ!」

光一は最初の戦いの時、ネクサスの記憶を見た。見てしまっていた。

だがその記憶の中にはあの姿はなかったのだ。

ドツツクン

「ん?」

ドツツクン

「なんだ?」

光一は心臓の鼓動のような音を聞いた。どうやら音はエボルトラスターから出てくるようだった。

光一はエボルトラスターを取り出した。エボルトラスターは脈打つように光っていた。

「うわ!」

エボルトラスターの光は次第に強くなり光一を包み込んだ。

~~~~~精神世界~~~~~

「……は？」

「ここはウルトラマンが作り出した精神世界だ。」

光一が今いる場所、それはネクサスの作り出した精神世界だった。そして目の前には男がいた。

「あんたは？」

光一は男に名を聞いた。

「真木舜一、ウルトラマンと最初に一体化したものだ。」

男、真木舜一は答えた。更にあの姿について語り始めた。

「あの姿は、俺のもしもの姿だ。」

「もしも？」

光一は首を傾げた。

「もし、俺と一体化した時、ウルトラマンが君が今ネクサスと呼んでいる状態だったら、あの姿になっていたかもしれない。」

「だからもしもの姿なのか。」

光一は納得した。だが新たな疑問が浮かんだ。

「だがあれがあんたのジュネッスならあの姿にはどんな意味があるんだ？ジュネッスの色は一体化したものの思いが表れてるはずだが。」

「約束だ。」

「え？」

光一の疑問にネクサスが答えた。

「あの姿は真木の約束を守りたいという思いから生まれたものだ、あの時の君には真木と同じ思いがあつたんだ。だからあの姿になれたんだ。」

「約束……」

約束という言葉聞いて光一は何かを思い出した。

「半年ぐらい前になんかあつてその時に薫と約束したんだ。絶対生きて帰って、て。」

「その約束、絶対果たせよ！」

真木舜一はその言葉だけ言い残し消え、再び光一を包み込んだ。

「戻った。……」

光一は元の世界に戻ってきていた。

「約束……か。」

光一は半年ほど前、薫とした約束を思い出していた。だが、

「……だけどあの約束、果たせた気がしない。どうしてだ？」

光一は謎の違和感を抱いた。その時、  
ドオツツクン！

さつきよりも強い鼓動が聞こえた。鼓動は何かを示していた。  
「これは・・・まさか!？」

光一はネクサスに変身し、鼓動が示した場所へと向かった。

キイイイイイン・・・ズドオオオオン！

ネクサスは鼓動が示す場所に降り立った。

「ギイギイイ！（きたか!）」

「（お前はバクバズン!?!）」

そこにはバクバズンがいた。

「ギイギイイ!」

バクバズンはネクサスにあからさまな体当たりをした。

「シューア!」

ネクサスは体当たりを避けながらバクバズンを蹴る。

「ギイギイイ!ギイギイイ!ギイギイイ!（お前のせい!お前の!お前のせいでラフ

レイアはあああ!」

バクバズンの声がネクサスの心に深く突き刺さる。

「(くう、)」

「ギイギイイ! (死ねええええ!)」

バクバズンは爪でネクサスを切り裂こうとした。が、カウンターを喰らった。

「ゼア!」

バチイ!

「ギイギイイ!」

ネクサスはジュネツスに姿を変え、腕を体の前でクロスし両腕をたてた。

「はあああ……」

両腕を伸ばし、両腕をL字にくんで“オーバー・レイ・シユトローム”を放った。

「ジュア!」

「ギイギイイ!」

バアアアアン

バクバズンは光の粒子になった、ネクサスはその場後にしようとした、が、

「「ギイギイイ!」」

「ジュア!?! (何?!?)」

光の粒子はバクバズンブルード二体、バクバズングローラーに変化した。

「ギイギイイ！」

「ゼアアア!?!」

バチイ バチイ

ブルード達は爪でネクサスを攻撃し火花を散らせた。

「ギイギイイ！」

グローラーは尻尾にある口から舌を出しネクサスの首に巻きつける。

「ぐ・・・」

ネクサスは引き寄せられまいと踏ん張るがそこにブルードが攻撃した。

ドガッ

ブルードにけられて体制が崩れたネクサスにグローラーは爪で攻撃した。

「ギイギイギイイイ!!」

バチイッ!

グローラーの爪をまともに受けたネクサスは片膝をついてしまう。

「「ギイギイイ！」」

バクバズン達はそんなネクサスに爪をつき刺そうとする。が、

「俺は・・・俺は!・・・約束を破るわけには・・・いかないだ!」

ネクサスはジュネツスジンガノグレーに姿を変えて、立ち上がると同時にラムダ・レイ・スラツシヤーを放ち、舌を切った。

「シユア！」

ブチイ

「「ギイギイイ!?!」」

自由になったネクサスはシューティングスター・レイ・ジエネレートをブルードに喰らわせた。

「ゼアアアアアア！」

「ギイギイイ!?!」

ドオオオオンンン!!?!?!?

ブルードは爆散した。

更にネクサスはクロス・レイ・シユトロームをブルードに放つ。

「シユアアア！」

「ギイギイイ!?!」

ドオオオオンンン!!?!?!?

二体目のブルードは爆散した。

「ギイギイイ!」

グロローラーはネクサスを切り裂こうとしたが、ネクサスに爪を折られてしまう。  
バキヤー!

「ギイギイ!?!」

ネクサスは腕を体の前でクロスし、腕を立てエネルギーを収束、右腕を上げ、左腕を下げた。

「はあああ……ディア!」

そこから腕を十字にして“ハイパーエボル・レイ・シユトローム”を放つ。

「ギイギイギイ!?!」

バアアアアン

グロローラーは消滅した。

「さて、私も行こうかしら。」

リコは魔人、ファウストになりネクサスがいる場所に飛んだ。

ズドン!!

ファウスト(リコ)はダークフィールドを展開する。

「(何!?)」

ファウストはネクサスに蹴りをいれる。

「ジュア!?! (この蹴りはまさか、リコか?!)」

「そうよ。」

ネクサスの問いにファウストは余裕そうに答える。

「(何でお前が!?!)」

「ふふ、消えなさい。」

ファウストはダーク・レイ・ジャビロームを放つ。

「シュア!」

ネクサスもエボル・レイ・シュトロームを放つ。

バアアン

二つの光線は相殺した。

「やるわね。光一。次は倒してあげる。」

ファウストは闇に消えた。同時にダークフィールドも消滅した。

「はあはあ、」

光一は元の姿に戻り息を切らしながらこう言った。

「リコ、次は絶対、闇から救い出す!!」

C  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
I  
N  
D  
&  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## episode 5 残虐／スペースビースト

ネクサス（光一）は戦っていた。赤色の姿で。皮をはがしたねずみのようなスペースビースト、ノスフェルと。

「シユアー！」

バヂー！

「グルアアア!?!」

ネクサスはノスフェルを飛び越えながらチョップする。

「グルアアア!」

ノスフェルは尻尾でネクサスを攻撃する。が、かがんで避けられる。

「グルアアア!」

「!?!シユアー！」

バヂー！

「グルアアア!?!」

尻尾を避けられたノスフェルは咆哮をあげながら爪で切り裂こうとしたが、その前にネクサスがクロス・レイ・シユトロームで爪を破壊した。

「シユア!」

ネクサスは左腕を胸にかざす。すると左腕のアームドネクサスが橙色に光り、ネクサスが腕を下に伸ばすとネクサスはジュネツスジンガノグレーに姿を変える。

スツ バチイ!

「はああああ・・・」

ネクサスは腕をクロスし、腕を立てる。更に右腕を上、左腕を下に伸ばす。

「シユア!」

バチイ!

「ギユグルルルウ?!」

ドタン バチイ ドオオオオンン!!?!!?

そこから腕を十字にしてハイパーエボル・レイ・シユトロームを放つ。それを喰らったノスフェルは火花を散らしながら倒れ爆発する。

キイン

「シユア。」

ネクサスは光一に戻る。

「・・・今日はあつさりだったな。」

光一はノスフェルがまるで本気を出していないような気がした。いや、実際そのとう

りだった。

くくく三十分後くくく

「グルアアア！（ふつつかあああああつ！）」

ノスフェルは光一がいなくなった後、高らかに咆哮をあげながら復活する。

「グルウオ・・・（ノスフェル。）」

「グルア！（ああ？ガルベロスか。）」

ノスフェルが後ろを振り向くとガルベロスがいた。

「グルウオオオオ・・・（言つとくぞ。やつを追い込みすぎるな。じやなきや死ぬことになる。）」

ガルベロスはノスフェルに忠告した。だが、

「グルアアアアア！（うんなん知ったことか！俺には再生能力があるんだからなあ！）」  
ノスフェルは聞く耳を持たずに、去って行った。

くくくある昼時の道くくく

ある日、薫は学校からの帰り道を制服を着て疲れた様子でとぼとぼと歩いていた。

「はく、夏休みなのになんで補習なんてあるんだろう。」

どうやら補習の帰りのようだ。

「そういえば友達的美樹ちゃんも家族と一緒に旅行で言つてたなあ。今頃どうしてるんだろう。」

薫は昨日嬉しそうに話していた友達のことを頭に浮かべて歩いていた。その時、

「グルアアア！」

「!? 何!? 何!?!」

突然咆哮が聞こえ薫は少しパニックになってしまふ。更に薫の視界にノスフェルが入り、その姿に恐怖した薫は身を隠し息を潜める。

「グルアアア……」

ズドン　ズドン　ズドン……

ノスフェルは足音をたてながら薫が隠れている場所へと近づく。

それを見た薫は叫びそうになるが両手でそれを抑える。

ノスフェルはそのまま通り過ぎた。

「……………ふう。」

薫はノスフェルがいなくなったことで安心したのかため息をついた。だがそれがいけなかった。

「グルウ……」

「へ？」

ノスフェルは薫の頭上にいた。

「ひー！」

薫はノスフェルから後ずさりをしながら逃げる。だがノスフェルの尻尾に巻かれて捕まってしまう。

「きゃー！」

「ひひひ！今からためえに面白いもん見せてやるよー！」

ノスフェルは流暢に日本語を話し、薫をある場所に連れて行く。

「ほれ、見ろー！」

「!?こ、これ……」

薫が見たのは炎上する車、ばらばらに引き裂かれた女性の死体、血まみれの原形のな  
い死体、そんな惨状であった。

「ひひひ、ここで見たものをあいつに伝えろ。」

ノスフェルはそう言い残すと薫を下ろして去って行く。

「……………」

薫はただただ茫然とし、何をすればいいか分からなくなった。そしてだんだんと悲しくなっていた。その時声が聞こえた。

「湖へ行け。」

「え？」

薫はその声に従い湖へと向かう。湖へ向かうとそのそばには美樹の兄、陵駕がずぶ濡れで倒れていた。

「あ！陵駕さん！」

陵駕を見つけた薫は急いで駆け寄り揺さぶった。

「陵駕さん！陵駕さん！」

「ぐ、ぐ、か、薫か。」

「陵駕さん！一体何があったんですか!? 美樹ちゃんは……」

薫は目覚めた陵駕に何があったかを聞く。

「美樹は……」

陵駕は何が起きたのか話す。

「……一時間前、車道……」

「お母さんまだつかないの？」

車道を守る車の中で薫の友達、美樹は母に聞いた。

「何言ってるの？さつき出発したばかりじゃない。」

その問いに美樹の母は優しく答える。

「まあまあ、久しぶりの旅行だからじゃないか？」

「確かにそうかもしれないませんが・・・」

美樹の父と母はいつもの言い合いを始めた。ここまではいつもの日常だった。だがそれはあつという間に崩壊する。

「グルアアア！」

「うわあああああ！」

いきなり現れたノスフェルはまず車を破壊し、美樹の目の前で父と母をゆつくりと惨殺した。それを見た陵駕は美樹を連れて逃げようとした。が、その前に美樹はノスフェルに捕まり、額に取り込まれる。

「美樹ー！」

陵駕はノスフェルから美樹を助けようとする。が、

「グルアアア！」

バシン！

「うわあああああ!?!」

ザバアアアンン!!?

ノスフェルの尻尾を受け吹っ飛び、湖に落ちた。

ザバア

「く・・・美・・・樹！」

ドサ！

陵駕の意識はそこで途切れ今に至る。

~~~~~現在~~~~~

「・・・それじゃ美樹ちゃんはまだ！・・・」

「ああ、生きてる。」

薫は美樹が生きてることが分かると安堵した。しかし、

フウオン！

薫の頭上を銀色の何かが通り過ぎ、ノスフェルが去って行った方へと向かって行った。

「!? まさか！」

薫はそれを追いかけた。陵駕もついていく。

t o b e c o n t i n u e d

# episode 6 愛／ヴィオレ

ズドオオンツ！

「グルアアア！（きたか！）」

夕暮れの山近く、ネクサス（光二）はノスフェルの前に音をたてながら降り立つ。

「おい！お前！」

「あ!?なんだ!?てめえらの言葉かったりいんだから早くしろ！」

「お前、なにをやった!？」

「ああ!? ただ、美樹とかいうやつを家族ごところしたなあ!あはははははは!」

ネクサスはノスフェルにここで何をしたか聞く。それに対してノスフェルは日本語でとんでもない事を笑いながら答えた。

「（ああそうか。）」

それを聞いたネクサスは左腕を胸にかざすと、アームドネクサスが橙色に光り、ネクサスをジュネツスジンガノグレーへと姿を変える。

「……ゼアアアアアア！」

ネクサスは悲しい叫びをあげながらノスフェルへ走り出す。

「グアアア・・・(ふ、引っかかったな。そんなま俺が取り込んだこいつを殺すがいい。)」  
ノスフェルはネクサスに聞こえない声で呟く。

「ゼアアアアア！」

ドツクン

「シユア!!」

ネクサスがノスフェルに拳をぶつけようとした時、鼓動がして動きが止まる。ネクサスにとつてそれは攻撃してはいけないと言ってるかのような鼓動だった。

「・・・まさか！」

ネクサスは透視能力を使い額に取り込まれた美樹を見つける。

「(美樹!?)」

「グルアアアア? グルアアア! (ん? 気づいたか。 まあいい!)」

ノスフェルはネクサスに突っ込み爪で切り裂こうとする。ネクサスはそれを後ろに飛び退くことでかろうじて回避する。だが、

「(くっ!)」

美樹が額に取り込まれてしまっているためネクサスは迂闊に攻撃することができなかった。

「グルアアアアアアア！」

ネクスラスとノスフェルの戦いは次第にノスフェル優勢になっていった。

~~~~~戦いの場所から二キロメートル地点~~~~~

その頃薫と陵駕はネクサスが飛んで行ったさきに向かっていた。

「なあ、薫。」

「? なんですか?」

「さっき通り過ぎたの、本当に光一か?」

「・・・はい。」

陵駕は走りながら薫に自らの頭上を通り過ぎた存在が本当に光一か聞く。薫は少し迷いながら答える。

「・・・ところでなんであいつはああなってるんだ?」

陵駕は薫にもう一つ聞く。

「・・・わかりません。」

それに対して薫は分からないと答えた。当然だ。

「とにかく今は光一さんのところに行きましょう。そこに美樹ちゃんもいるはずですよ。」

薫達は先を急いだ。 . . . .

くくく再び戦いの場くくく

「グルアアアア! (どうしたああ!!)」

ザツシユ! バチツ!

「ジュアアア!?!」

ノスフェルの爪がネクススを切り、火花を散らした。

「く!、どうする? どうすれば美樹を . . .」

「私の力を使いなさい。」

「(え?)」

ネクサスがどうすればいいかを考えていた時、謎の声が脳内に響く。

「(力を使え?)」

「グルアアアアア!! (無視すんじゃねえ!!)」

「!？」

ネクサスが自分を見ていないと感じたノスフェルは爪でつき刺そうとするが、横に転がりながら避けられる。

「右腕を胸に。」

「! ジュア!」

キーン

ネクサスは謎の声の指示どおりに右腕を胸に持つてくる。するとアームドネクサスが紫に光り、

ネクサスは紫の姿、" ジュネツスヴィオレ " へと姿を変える。

「グルアアア!?! (姿が!?)」

「シユア!」

ネクサスは右腕を上に掲げ、紫に光らせる。それから一旦腕を胸の横に持つていき、

腕を前に突き出して”コズミック・レイ・シュトローム”を放つ。

「グルア・・・」

それを受けたノスフェルは停止し、額を開いた。

「ジュアア！」

それを見たネクサスは”セビングシュート”でノスフェルから美樹を救出し、近くの地面にそつとおろす。

「!? 美樹！」

「美樹ちゃん！」

そこに陵駕と薫が駆けつける。

「グルオオウアアア!!」

やつと動けるようになったノスフェルは爪から光刃を打ち出す。

「はあああ・・・ゼア！」

ドオオオン! バキツ!

「ギユググルルルウ!?!」

ネクサスは右腕を左腕を打ち付け光球を発生さして打ち出す技”ストライク・レイ・ジェネレート”を放ち、光刃を打ち消して、爪を破壊する。

キーン

ネクサスは赤色の形態、ジユネツスに姿を変えて腕をクロスしてから腕を立てる。  
「はあああ………」

そこから腕を上げ、L字型にして“オーバー・レイ・シフトルーム”を放つ。

ギイン

「ゼアアアア!!」

ビイイイイイ!!

「グルアアアアアア!!?!」

バアアアアアアンン

それを浴びたノスフェルは青い光を放ちながら粒子になった。

「やった!」

ノスフェルが倒されたの見て薫は喜んだ。

「……あれ?薫ちゃん?」

「!? 美樹ちゃん!」

それと同時に美樹も目覚めた。

「ねえ、お父さんやお母さんはどこ?」

「!………」

薫も陵駕も黙ってしまった。もうこの世にいないなんて言えないから。

「・・・!!」

ネクサスは陵駕を見て何かに気づいた。陵駕にネクサスと似た存在を感じたからだ。

t o b e c o n t i n u e d

## episode 7 守るもの／セイバー

ノスフェルの事件から数日後、薫は病院に来ていた。念のために入院している美樹のお見舞いの為である。

この病院は普通の、ではなく国直結の病院である。

実はラフレシアの時もこの病院である。

ガラッ……

「あ、薫ちゃんおはよう。」

「おはよう、美樹ちゃん。」

薫は扉を開け、美樹の病室に入る。

「薫ちゃん。」

「ん？」

「お父さんとお母さん、いつ帰って来ると思う？」

「あ……」

美樹の言葉に薫は黙りこんでしまった。

くくく別の病室くくく

ところかわって陵駕の病室、そこで陵駕は自分の中にいるものに話しかけていた。

「おい、おまえ、誰だ?」

「んあ? 俺か? いいぜ! 教えてやる。俺の名は、ウルトラマン ゼロだ!」

頭に響き渡るような声とともに陵駕の左腕に青い水晶のついた腕輪が出現する。

「……………でおまえどういうやつだ?」

陵駕はスルーして次の質問をした。

「え、スルー! もうちよつとなんか……………ん、まあ、い、いいか。

俺は、ていうか俺たちは世界のバランスを保つ存在、らしい)」

ゼロは自らと自らと同じ存在について話した。最後かなり怪しくなったが……………

「らしいてなんだ? おまえ自分のことわかってるのか?」

「(えくと、親父に言われたことをそのまま……………)」

そこを陵駕に真つ先に指摘された。指摘されたゼロは何か言い返そうと事実を言ったが

そこで言葉が止まってしまふ。

「はあ、まあいい。後でまた聞く。」

陵駕はそのまま横になって話を切り上げる。

「(こいつ、タイガよりも面倒くさいかもしれない。)」

ゼロは心の中で呟いた。

「おい、聞こえてんぞ。」

だが、声(?)に出ていた。そんなやりとりを続けていると、

ガラッ!

「君の中にいるものについて詳しく知りたいのならこの本を読むといいー!」

「うお!」

第3話の白衣を着た男性がいきなりドアをいきよよく開け、その手に持つ本、別の世の記録を置いた。

「佐々木先生、仕事に戻って下さ〜い。」

「あ、はい。」

白衣を着た男性は看護師に仕事に戻るように催促され、陵駕の病室を出た。

「.....」

陵駕は置かれた本を手に取り、中を見た。

本にはゼロについて書かれていた。年齢や特徴など詳しく。

「これ、すっげな〜。」

陵駕は棒読みのようなイントネーションで感想を語った。(こえーよ)

~~~~~病院の敷地外~~~~~

「ここならいいか。」

光一はエボルトラスタ―を取り出した。

すると、エボルトラスタ―は光を発し、光一を包み込み、

ネクサスが作り出した精神世界の中に引き込んだ。

「さて、今度はあんたか。」

光一の目の前には赤と黒の青いラインが入った服を着た女性がいた。

「まずあんたの名前は？」

光一はその女性に名を聞いた。

「橘さゆり、あなたの前の適合者よ。」  
デユナミスト

「最初に、あの姿はなんの姿だ？」

光一は前回変身した姿について聞いた。

「あれは愛の姿。」

「愛？」

「そう、愛。あなたはあの時、あの美樹つて子を助けようと思ったんでしょ。」

「あ、ああ。」

「守りたいものの為に戦う、それもまた愛なの。」

「なんかよく分かんねえなあ。」

さゆりは愛について語ったが光一はあんまり理解できていないようだった。

そんな光一にさゆりは

「いづれ分かるわよ。」

優しい言葉を投げかけた。

「そんなもんか？」

「そんなものよ。」

それを聞いた光一は微笑んで「そうか。」と言った。

「そういえば、あれはあんたがやったのか？」

光一はあの時自分を止めたのはさゆりかどうか聞いた。

「あれは……第五のデユナミストの意志よ。」

その言葉の後、光一は光とともに元の世界に戻された。

「おっと。……美樹にいつか言わないとな。あいつの親のこと。」

戻つてすぐ光一は自らにいい聞かせるように呟く。

直後、エボルトラスターが鼓動のような音と光を発した。

「これは……なんか出てきたな。」

光一はエボルトラスターを引き抜き、天に掲げる。するとやさしき光が光一を包み、ウルトラマンネクサスへと姿を変え鼓動が示す場所へ飛びさる。

くくく病院のある山の近くくくく

山の近くの洞窟、そこでゴモラは眠っていた。

そこに、一つの影が現れる。

「行け。」

影、ネオサーベル星人はその手から闇を発生させゴモラに植え付けた。

「ぐギャアアアオオオおお!!」

ゴモラはEXゴモラとなり、洞窟から地上へいきよいはくは出る。

ズドオオオンン!!・・・

ゴモラが地上に出現した同時にネクサスは降り立つ。

「(?! 闇に操られているな。)」

ネクサスは右腕のアームドネクサスを胸に持つてくるとアームドネクサスのクリスタル部分が紫に光る。

そして、ネクサスが腕を伸ばすと、光の波紋のようなものが広がり、消える頃にはネクサスは紫の姿、ジュネツスヴィオレに変わっていた。

「シユアッ!」

ネクサスはゴモラへと近づいていく。

「ぐああああアアアッ!」

ゴモラは近づけぬように尻尾を槍のようにし、

ネクサスにその尻尾の突きを喰らわそうとするが

アームドネクサスを重ねたネクサスが瞬間移動“マツハムーブ”を使ったことで避けられてしまう。

攻撃を避けられたゴモラはEX超振動波を放つ。

ネクサスはそれを“クロス・レイ・シュトローム”で相殺、

その後、右腕を掲げ、紫に光らせる。そして腕を胸の横に持つてきてから腕を前に突き出し、

“ゴズミック・レイ・シュトローム”を放つ。

「ぐギャアアアオオオオおお．．．．．」

それを受けたゴモラは元の姿に戻った。

「よし。うまくいった。」

ネクサスはゴモラを帰す為近づこうとした、その時、

ドオオオンン

「ギイ!? おおおおお．．．」

ドタアアアンン．．．

どこからか飛んできた光弾を受け、

ゴモラは地面に倒れ、そのまま動かなくなった。

「(え?)」

「まったく、使いものにならねえなあ。」

光弾を放った本人、ネオサーベル星人はサドラとともにネクサスの前に現れた。

「(おまえ、一体何を．．．)」



## episode 8 魔獣／violence

「ガアアアアアアアア！」

ネクサス、光一の前に突然ガルベロスは現れた。

「おまえは・・・ガルベロス!? なんでここに・・・」

ネクサスは突然のことに驚き、

なぜここにいるのか問いた。

「グルウアアア! (ああ? そこにいるやつが気に食わなかっただけだ!)」

そう言つてガルベロスは立ちすくしているネオサーベル星人を指差した。

(させてるようには見えない)

「ぐっ・・・な、なら、これでどうだ!」

ガルベロスの気迫に負けたサーベルはあろうことか病院の方に光弾を飛ばした。

バシッ!

「(させるか)」

それをネクサスは空中で受け止め、紫の光球へと変えた。

「何!?!」

「シユア！」

それを見て驚いているサーベルに光球を打ち出し、  
ストライク・レイ・ジェネレート（リバースver）を放つ。

「くっ！」

だが、サーベルは飛び上がり、それを回避する。

ヒュンツ

「な!?、グアア!?」

しかし、光球はバウンドしてサーベルに直撃する。

「グルアアアアアア!!（喰らえ!!）」

「!? ぐおっ!?」

ドオンツ・・・ドオオオオンンン  
!!!!

更にガルベロスが超振動波を放ち、

まともに喰らったサーベルは爆散して消滅した。

「ぐるうう・・・（帰るか）」

ガルベロスはサドラを食らって得た霧を出す能力でその場を後にする。

「そのまま行かせるかよ。」

ネクサスから戻った光一はガルベロスの後をつけた。

~~~~謎の場所~~~~

ここはガルベロスやスペースビーストが集まる場所。

そこにガルベロスは戻ってきた。

「戻ったようね。ガルベロス。」

「グルウオ（はい、姐さん。）」

ガルベロスが戻ったのと同時に奥から魔姫リコが現れる。

「でも、知らない間に客を連れて来ていたみたいね。」

「（え?）」

「リコ……」

光一はガルベロスの頭から飛び降り、

リコの名を呼び、対峙する。

「グオアア!!?（おまえ!!?）」

「リコ、何をやってんだ?」

驚いているガルベロスを他所に光一は問う。

「貴方こそ、何しにここに來たの？」

リコはその問いを無視して逆に問う。

「おまえを連れ戻しに來た。」

「嫌だ、と言つたら？」

「力づくでも連れ戻す。」

「……できるかしら？」

そう言い合い、光一とリコはネクサス、ファウストにそれぞれ変身する。

「貴方に私を連れ戻すことはできない。この新しい力があるから！」

瞬間、ファウストは怪しき光が包み込み、

その姿を“カオスファウスト”へと変える。

(姿はファウストのベースの銀を暗く、赤の部分を紫に、

黒の部分を白に、元々金だった部分は黒にしたもの)

「意地でも、おまえを連れ戻す！」

対してネクサスはジュネッスヴィオレに変わる。

「お、おい、これどうする？」

それを見ていたノスフェルはどうすればいいかわからず困惑する。

「えーほつといていいんじゃない〜」

一緒に見ていたクトウーラはのんびりしていた。

「じゃあ超合体しよう」

「え、あああああああああ!?!」

二体は何者かによって強制的合体させられた。

~~~~~病院近く~~~~~

所変わって病院の近く、薫がうつむいた様子で歩いていた。

「あの事、美樹ちゃんに何て言えばいいんだろう。」

やはり、前回の事を気にしているようだ。

「(そんな事は誰にもわからない。)」

「ん、頭に声が……!」

薫は後ろから異質な気配を感じ取った。

「だ、誰?」

振り向くと、そこにはガルベロスが間近にいた。

「グルルウル……」

「ひい！ ま、また・・・」

「(おい)」

「え？」

ガルベロスを見た薫は逃げようとするが頭に声が響き、足を止める。

「(ちよつと来い。)」

くくく再び謎の場所くくく

場面は再びネクスラスとファウストの戦いに戻る。

ドゴツ

「シユア!?!」

だが、ネクスラスの方は不利のようだ。

「光」、これで・・・」

ファウストは両方の拳に闇のエネルギーを溜める。

そしてー

「終わり。」

体の前でクロスして“カオス・レイ・ジャビローム”を放った。

「！ シュアア！」

ネクサスも“コズミック・レイ・シュトローム”を放った。

ドオオゴオオオオオンン・・・

二つの光線はぶつかり、ネクサスの前で爆発した。

「ふ、本当に終わりね。」

ファウストは煙を見て眩くが、

「！！」

煙が晴れると、そこにはネクサスの姿があった。

先ほどネクサスが放ったのはデيفェンスver、

シールドとなってネクサスを守ったのだ。

「くっ!! ならまた光線を・・・」

「リコさん」

ファウストは再び光線を放とうとするが突然の見知った声によって止まってしまった。

「!? 薫！」

その声の主は薫だった。

「リコさん、何が貴方をそうさせるんですか？」

薫は問う。

「私は

「何を したいんですか？」

更に問う。

「私は・・・？何のために闇に・・・」

「分からないんですね？」

薫の言葉にファウストは、リコは頷いた。

「だったら貴方は闇である意味はありません。」

「そうだ。 おまえが闇でいる必要はない。

戻ろう、みんなの所に。」

ネクサス、光一は右腕を上に掲げ、虹色を帯びた紫に光らせる。

それから胸の横に持つていき、更に白い光を纏わせる。

そして、鮮やかな光とともに前に優しく突き出して、

“ミラクルコズミック・レイ・シユトローム”を放つ。

「あ、」

それを受けたファウストはリコの姿に戻った。

t o b e c o n t i n u e d . . . .

(終わると思った?)

ヒュンっバシイ

「!? ジュア!?」

「きゃ!?!」

突如地面から紫の触手が出現し、

ネクサスと薫を拘束する。

そしてその触手を操る怪物、クトゥルフエルが現れる。

その姿はノスフェルと触手を持ったムンクの叫びのような



## episode 9 臨界点／over

クトウルフエルは身動きが取れないネクサスを尻目に  
薫の方へと足を進める。

「ひい……ん、んないで……」

今の薫は両腕両足を縛られて足が地面に

ギリギリつくかつかないかの所で中吊りの状態になっている。

怪物はゆつくり、唾液を垂らしながら近づく。

「グルウアアア！（ノスフェル！クトウラー！）」

だが、怪物の進行を止めたのは敵であるはずのガルベロスだった。

「グルルルウ……（どうした？ いったい何があった！）」

「j a m a d a g a r u b e r o s u !」

それはガルベロスを壁へ投げ、崩落させて埋めた。

「e e e a t e e e a t a a a e a t n i n g e n !」

「邪魔者がいなくなった」 “は薫へと向きなおす。

そしてまたゆつくりと……



ビィイ！イィインンン・・・

超超必殺光線、〃クロスオーバー・レイ・シユトローム〃を怪物に放つ。

「by x a d e h a n a z i m a r a a a a a a a a a a a a a a a a ! ?」

僅か一秒足らずしか放射されなかったその光線を受けて  
クトウルフェルは青い粒子となり跡形もなく消し飛んだ。

さあ・・・

「！ わつと！ 触手が・・・消えた？」

同時に触手も消えた。

「・・・！、シユア・・・」

ネクサスは片膝を突き、光を発して光一に戻った。

「光一さん！」

「俺よりも、リコの方へ行ってくれ。」

「！ 分かりました。」

その後、光一は薫とリコとともに道場へと戻った。

くくく夜 ガルベロスの場合くくく

ガラガラ・・・

「グルウオ・・・（今は・・・夜か？

！ あの後倒されたならノスフェルは復活してるはず！

いや、クトゥーラももしかしたら・・・」

瓦礫から脱出したガルベロスは二体を探した。

・・・だが、見つからなかった。

くくく夜 光一の場合くくく

夜、光一は薫と分かれ自室に戻っていた。





「???」

（ふく、危なかった。あのまま行ったら再生機関消えるところだったよ。

クトウーラの細胞もね……ひひひっひひひ……あひやっひやひやひやひや、  
アーヒヤツツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤツツヒヤツツヒヤツツはっはっは。）」

不敵に笑う小さな怪物は何かを企んでるようだ。……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## episod e 10 災厄／G

「ふう……」

「やっと退院だな」

○月×日、正午、山村凌牙は病院から退院した。

「で、しばらくお前は俺の中にいるんだって？」

「ああ」

今凌牙に憑依しているウルトラマンゼロはしばらく凌牙の中に居続けるようだ。

謎の生物がこの世界にやってきた為、ゼロはこの世界に来たのだが、

いきなり力を奪われ、エネルギーを節約する為に眠っていたところ、

凌牙が死にかけているのを見て助けたのだ。

凌牙の傷は完全に治ったが、ゼロの方は凌牙から離れると消滅するほどまでに弱っていた。

「つまり、お前の完全回復、そしてそいつを倒さないとお前は出てくれないと」

「その通りだ。」

「分かった。」

凌牙はそれを了承した様だ。

「手伝ってやるよ、だが妹が傷つきそうな時しか使わないからな。」

「な!？」

だが、凌牙は妹の為にゼロの力を使う様だ。

「はく・・・お前なあ」

ゼロは頭を抱えて呆れていた。

「ため息したいのはコッチだ」

凌牙はゼロがいる（と思われる）青いクリスタルがついた腕輪を叩く。

「彼らはまだまだなみたいだな」

「先生仕事に戻って下さい。」

その様子を遠くで見ていたのはこの病院の医師、佐々木みこと先生だった。

「美樹ちゃん遅いな〜」

一方、薫は美樹が病院から出てくるのを待っていた。  
凌牙同様今日が退院日だ。

だが、薫の背後に、近づくと影が。

影は足音をたてずにゆっくりと薫に近づき……

「ていー！」

「わ!?!」

手で目を覆った。所謂目隠しである。

「だーれだ?」

「み、美樹ちゃん?」

「正解!」

薫に目隠ししたのは美樹であつた。

「もう美樹ちゃん!いきなり何してるの!」

頬を膨らませ、美樹を怒る薫。

「ご、ごめん!久しぶりの薫ちゃんのお出かけだったからつい・・・」

怒られた美樹は慌てて頭をさげる。

どうやら薫と一緒に出かけるのが楽しすぎて浮き足立ってしまったようだ。

「そんなことより、早く行こ! お買い物お買い物♪」

「ちよ、ちよつと美樹ちゃん!? 押さないでよ!」

薫は上機嫌な美樹に困りながらも、笑顔で彼女ともに歩き出した。

「大丈夫そうだな。」

「いきなりストーカーかおまえは!」

そんな二人の様子を凌牙が見ていた。

だがすぐにその場を離れた。

「あれだけ笑ってたら、もう大丈夫だろ。」

美樹の笑顔を見て大丈夫と判断したからのようだ。

「さて、」

凌牙は壁に貼り付けられたチラシをとる。

そこには“ 隊員募集 ”と書かれていた。

「今回の怪物について、知ってることを話してもらおうか。」

凌牙はチラシに書かれた住所の場所に向かった。

くく街道くく

「・・・・・・・・」

光一はベンチに座り、ただ空を見ていた。

前回、怒りに任せてクトウルフェルの殺したことに憤りを感じているようだ。

彼は優しい、その優しさ故に、人を、動物を、生命を傷つけることを恐れている。

しかも今回は感情に任せて相手を殺した、許せるはずがないだろう、

自分のことを。心に突き刺さりはしないだろう、命を消した事実が。

「あれしか、なかったのか？ もっと別の・・・何故だろう。」

あれ以外どうすれば良かったのか、思いつくはずなのに、

思いつかない。あれが正しかったってことにしたいのか？ 俺・・・

光一は空を見る。答えは出ない。絶対に・・・

〕  
〕  
〕  
ダム内部  
〕  
〕  
〕

村はずれのダム、その地下に高度な技術によつて作られたであろう基地が。

その基地の司令室にて、数名の者が集まっていた。

「皆、よく来てくれたわね。」

司令室の一番前にある司令席に座っている女性が言った。

「ついに動き出してしまったのか？ スペースビーストが。」

戦闘部隊のものが来そうな青いスーツをきた男性が女性に聞く。

「ええ、それどころか宇宙人まで出てきたわ。」

男性の質問に答えた後女性は、左のオペレーター席にいる男性の方に目で合図を送る。

彼はコンピューターを操作する。指令室前方の画面に画像が映し出された。

スペースビーストのラフレイア、バクバズン、ノスフェル、ガルベロス、

怪獣のゴモラ、宇宙人のガッツ星人、ネオサーベル星人だ。

「今日までに存在が確認されたスペースビースト、及び怪獣と宇宙人よ。この内、

住民の証言から宇宙人二体と怪獣の死亡、

及びスペースビーストも獣のようなこの二体以外倒されたことが確認されたわ。」

女性はガルベロスとノスフェルを指差しながら今日までの異常なる存在の報告をした。

「つまり、すでにウルトラマンは覚醒していると?」

青いスーツを着た男性が女性に質問した。

「そう考えて間違いはないでしょうね。」

それを聞いたもう一人の男性が机を勢いよく叩いた。

「何てことだ、もう既にウルトラマンとして過酷な運命を背負ってしまった物があるのか!!」

「その通り。」

指令室に居た全員が声のした方を向いた。そこには凌牙がいた。

「りよ、凌牙!?!病院に入院していたんじゃ・・・」

先ほどの男性、〃カザモリ・マサキ〃が凌牙を見て驚いた。

彼は凌牙と美樹の叔父である為、凌牙を知っている。

「今日退院した。それより、」

凌牙は少し声色を変えて言った。

「教える、スペースビーストやウルトラマンのことについて!!」

くくく街道くくく

「・・・もうすぐ夜になるか。」

再び街道、光一はあれからもただ空を見上げていた。

ただ違うのは光一から覇気が若干消えてることくらいだ。  
「……………帰るか」

暗い表情のまま、彼は腰掛けていたベンチから立つ。

「あ、光一じゃないか。」

その時だ、ある男性がやってきたのは。

その男性は……………

「孤門さん」

” 孤門一輝 ” であった。

「どうしたんだ、こんな所で。」

「……………孤門さん」

光一は孤門の質問に答えず、逆に自分が質問した。

「孤門さんは、後悔したことがありますか？」

「ん、そや偶に……………」

「俺はつい最近ありました。」

そう言いながら光一は思い出してしまった。

あの時クトウルフェルを倒してしまった時のことを。

怒りに任せて命を奪ってしまったことを。

「じぶんはなんて．．．ことを．．．してしまっだん．．．だと．．．」

泣きながら光一はそれを言葉にした。拳を握り締めながら。

それしか言葉にできなかった。それしかもう出てこなかった。

「．．．．．何かつらいことがあったんだね」

「．．．．．はい．．．．．でも言えませんが．．．」

「そう．．．．．か．．．．．」

孤門は少し迷った後、光一向かってこう言った。

これしか言葉がなかったのかもしれないが。

「それでも、前に進むしかないよ。起きてしまったことはしょうがない。

過去になってしまったものは背負って行くしかないんだ。今生きてる僕たちがね。」

「．．．．．」

それを聞いた光一は何か言おうと思ったが言葉が出なかった。

「．．．．．答えは君にしかわからない。」

孤門は最後にそう言って去って行った。

「答え．．．．．」

答えは自分にしかわからない。それ聞いた光一はある言葉を思い出した。

自身の父であり、師匠でもある夢野石神の言葉を。

「何かを守る時、背負う罪を恐れてはいけない。その罪を自分で受け入れ、大事なものの為に戦わなければ、何も守れやしない。

今ある命を守るには、過去となつてしまう命を背負わなければならぬ。そのことから逃げるな」

「……ありがとう、父さん、孤門さん」

光一は再び決心した。何があろうと、どんな罪を背負うとも、守るべきものを守ると。その時、爆撃音が聞こえ、エボルトラスターも光り始める。

「……行くか」

~~~~山林近く~~~~

「ギイエエエエエエエエ!!」

山林近くの開けた場所、そこで黄色い戦闘機二機が

インビジブルタイプビースト”ゴルゴレムと戦闘していた。

「ちっ！ おい！ 当たんねえぞ！ どういうことだ！」

黄色い戦闘機ガッツウイングに乗っている男性”シンジヨウ・テツオ”が

先ほどから当たらないビームにイラついていた。

「あいつ、異層を移動してるんや。だからこっちに奴が戻らんと攻撃できんで。」

「じゃああいつが人食うまで待ってっか！」

もう一機のガッツウイングに搭乗している

男性”ホリイ・マサミ”の分析を聞いたシンジヨウは更にイラつく。

「落ち着けや！ いまこつちにチェスターδとガッツイーグルが向かって来とる！  
それが来るまであいつの気引けつくとくんや！」

イラつくシンジヨウをホリイがなだめる。

その時、ウルトラマンネクサスが飛来した。

「!? なんだあいつは!？」

「まさかウルトラマン?！」

ネクサスの登場に、シンジヨウとホリイは驚愕と困惑の表情を浮かべる。

ネクサスは二人がそんな表情をしていることなど知らず、

目の前のゴルゴレムと戦闘を開始する。

~~~~~数分前の山林近く（逆側）~~~~~

「じゃ、ばいばい！薫ちゃん！」

「うん、またね美樹ちゃん！」

ゴルゴレムが現れる少し前、薫は美樹と買い物を終え、わかれた。

家に帰って買ったものを置くと、前回の事を思い出した。

「あの怪物を倒した時、光一さん、どことなく悲しそうだった…」

もし、いつもスペースビーストを倒してる時にあんな風になっているのなら

光一に戦ってほしくない、そう薫が思った時、爆発音が響いた。

「！」

薫は胸騒ぎがして窓のカーテンを開ける。

そこにはネクサスとなつた光一がゴルゴレムと戦っている姿があつた。

「光一さん！」

薫は家を飛び出し、ネクサスとゴルゴレムが戦っている山林近くの方へと駆け出した。

「(光一さん！ あんなに悲しそうだったのに、なんで、なんでまた戦うんですか!?)」

薫は届かぬ叫びを心の中で繰り返しながら山林近くにたどり着いた。

「光一さん！」

「！ ジュア!?!」

薫が光一の名を叫ぶと、ネクサスは薫の方を向き、驚く。

すぐに薫に下がれ、というような動作をした。

「ギユルアアアアアア!!」

ゴルゴレムが咆哮をあげると顎の口をついた触手を伸ばし、

薫を捕食しようと大口を開けて突つ込む。

「ひっ!?!」

「ジュア！」

ゴルゴレムの触手が薫を捉える前にネクサスが触手を掴み、薫から離す。

「ジュ・・・ア！」

「ギイエエエ!!」

ゴルゴレムは触手についている口から火球を放ち、

ネクサスの手を触手から離させ後退させた。

ネクサスはゴルゴレムに飛び蹴りを決めようとするが、

その前にゴルゴレムは別の異層に移動。

これによりネクサスの攻撃はゴルゴレムには当たらず、

ゴルゴレムの体をすり抜けた。

「ギイエエエエエ!!」

そして元の異層に戻ったゴルゴレムはネクサスを火球で吹き飛ばす。

「ジュアアア!?!」

ネクサスは大きな音を立てて仰向けに倒れる。

「光ーさん・・・」

薫はネクサスが今戦いをやめる気がない事を理解し、

ならばせめて彼を助ける為にゴルゴレムの弱点を探す。

「・・・見つけた！」

数秒、薫はゴルゴレムを見つめ、背中中の水晶体が弱点だと突き止めた。

「光一さん！ あの光ってるやつが弱点です！」

薫はネクサスに弱点を教えた。

それを聞いたネクサスは“パーティクルフェザー”で水晶体を狙う。

しかしゴルゴレムは別の異層に移動してそれを回避する。

だが数秒後ゴルゴレムが苦しみの声を出しながら姿を現した。

水晶体は破壊されている。

「いったい何が!？」

シンジョウが驚いているとクロムチェスターδが現れた。

「チェスターδ、現地到着。水晶体を破壊した。」

先ほど司令室で女性に質問していた男性“和倉英輔”がシンジョウ、ホリイに通信してきた。

「！ ジュア！」

ゴルゴレムが苦しんでいる間にネクサスはジエネッスに変わり、

左腕を突き出し、その上に右腕をクロスさせる。

すると腕が青く発光。腕を立てると青い電気が腕と腕の間に発生する。

「ハア………」

そして腕を伸ばし、L字型にして“オーバーレイシユトローム”を放った。



“ 根元破滅海神 ガクゾム ”

「ギ  
ウ  
ア  
ア  
ア  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ウ  
!!

ア  
ア  
ア  
ア  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ウ  
ウ  
!!

ガクゾムは空に向かって高らかな咆哮を上げた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d